

## 結城先生から贈られたピアノで さわやかに「うたごえ広場」

結城先生は、母校の赤湯小学校にピアノを二台寄贈されました。一台目は大正十年、二台目は昭和十二年の寄贈で、記念館にあるのは二台目のピアノ。調律もして現役で活躍しています。

十月十九日には、赤湯小学校児童の時にこのピアノを弾いた経験のある大場秀子先生と、天童市の高橋あゆみ先生をお迎えし、なつかしい歌を胸を熱くしながら心ゆくまで楽しんでいただきました。

この日は、初めて記念館にお越しいただいた方々も多くいらっしゃり、三七名の皆さんが、結城先生のピアノとともに記念館を楽しんでいただきました。協賛の原画展も好評でした。



## 初企画 特別土曜塾 「3Dプリンターに初挑戦」

大好評をいただいている「土曜自由塾」は小学生対象ですが、今回の「特別土曜塾」は中学生から現役仕事世代を中心に企画し、一二組一九名の皆さんに参加いただきました。

講師に、県産業科学館前館長で山形メーカーズネットワークの天津清先生をお願いし、3Dプリンターで結城先生のペンダント作りに挑戦しました。一二台のパソコンやソフットの準備も全て大津先生にお願いしました。データ入力に苦戦しつつも、3Dプリンターが立体を作っていくと、「すばらしく感動した」「いろいろな可能性を感じる」などの感想をいただきました。



## 「日本銀行総裁 結城豊太郎」〜書簡にみるその半生〜 八木慶和著から 第二章 安田保全社時代―財閥近代化のために― 第四節 金融恐慌・退陣

### 三 結城の辞意表明と外遊 ②

結局は高橋も井上も結城の辞任を認めるほかはなかった。

話を聞いて結城は惘然たる思いがした。自分の誠意が理解されず、排斥されるのは心外だった。前からこんなことでは長続きしないとは思ってはいた。結城は考えた。自分は番頭型ではない。信念をまげてまで安田に残る気はない。熟慮の末、結城は総長の二代目善次郎に辞意を申し出た。昭和三年二月のことである。(略)

安田は後任確定まで結城をつなぎとめ置くこととして、結城は安田に籍を置いたまま外遊するという方法が考え出された。

昭和三年六月七日、結城は妻の実家の両親に次の手紙を送っている。

帰来、安田家の方にては、安田銀行副頭取として外遊してくれとの事に有之、高橋翁は、あと事はおれが相談相手になって引き受けてやるから、安心して出かけよというふうの有之、予定通り(六月)二十一日神戸港出帆。榛名丸に乗ることとし、東京は(六月)十日にたつつもりに候。万事は、九州旅行位に考え、手軽に

いたし、世間へもそういう風に発表致し候。(略)

〈訪問先マルセル・ユ・ロンドン、スコットランド、ドイツ、ニューヨーク、サンフランシスコ〉

結城の当初の帰国予定は四年一月であったが、実際に帰国したのは四年三月と大幅に遅れた。遅れたのは、結城の後任の決定が予想外に難航したためである。難航したのも無理はない。頼んで来てもらった結城を、格別落ち度もないのに、それどころか立派な業績さえ上げているのに、気に入らないから辞めさせたとあっては、その後任に喜んで来るような人はいなかった。(略)

こうして結城は安田を去った。しかし、安田における結城の功績は何人も否定できない。結城は疲弊の殻に閉じこもっていた安田の体質改善を図るべく、次々と近代化施策を打ち出した。従来の安田の消極方針を脱却し、積極的に外部進出を図った。結城の改革と開放の政策は、安田財閥の近代化に大きく貢献した。ただ、この結城の誠意と努力は安田一族には理解されなかった。しかし、結城にとっては辞めたのは幸せで、留まれば一生安田の番頭でおわったのではないか。